

第53回 日本書展

審査所感

【漢字作品】西村東軒 (にしむら とうけん)

日展特別会員 全国書美術振興会理事 「日本の書展」現代書壇代表

今回の53回展において1,162点という多数の応募をいただきました。その中で漢字部門の応募者は859点を数えています。その多くの作品の中から良い作品を見落とすことなく選び出すという気持ちで審査員一同任に当たりました。まずは例年入選約40%と大変厳しい中での審査であったことを書き添えたいと思います。作品は若年者から老年の方まで年齢層も様々で臨書に対する姿勢や考え方が違うものが集まっていたように感じました。

多様多彩な書体の古典臨書作が出品されていた中で特に王羲之、米芾、空海など親しみやすい古典に挑む方が多くみられましたが、各人の表現にも工夫がされていました。徹頭徹尾形臨にこだわったもの、古典の意をくんだ中に自己主張を加味したもの、更にはかつて上條信山先生が提唱されていた表現的臨書や創作的臨書といえる作品などです。結果的には多角的側面から選考しましたが、最終的に気持ちのこもった練度の高い作が残ったという印象です。

次回展に向けて参加者への要望になりますが、古典の勉強の幅を更に広げ、また練度が高く自信をもって発表できるような作品制作を目標に努力してください。今後を期待しています。

【かな作品】高木厚人 (たかぎ あつひと)

日展特別会員 全国書美術振興会理事 「日本の書展」現代書壇巨匠

中国から伝わった文字、漢字をもとにその音を用いることで我々の祖先は自分たちの言葉を表記する方法を見いだしました。そしてその後、漢字の文字を崩し省略し仮名文字を完成させます。文字の使い方としての「仮名」から書体としての「仮名」が生まれた平安時代中期から平安末にかけて、仮名文字の書美は最高潮に達します。今日、仮名の臨書対象とされる古典はほとんどその時期に生まれたものです。

今年のNHK大河ドラマ「光る君へ」の放映は我々仮名書にかかわる者にとって見逃すことのできない番組でした。紫式部の時代の宮中の様子はまさに仮名が力を持って生きていた時代、当時の状況を知る格好のドラマでした。

さて、今回の応募作品は力作揃い、書き抜かれたものが多く、審査にあたる者としてはとても嬉しく思いました。入選は41%と非常に厳しいものでしたが、その入落を分けるものは、抽象的ですが、作品に書き手のリズム、呼吸、いのち、気が感じられるか否か、入っているか否かというところなのかなと思います。

まずは、墨色はうすすぎないこと、墨量は多すぎないこと。この2つは絶対に守ってください。それぞれの古典はすべて型を持っています。写し写し写して書くことで、その古典の持つさまざまな書き振りを真似る技術を手に入れてください。そして、その技術を駆使して臨書作品に仕上げていくのですが、その書く行為の中に真似した技術だけではなく、書き手のいのちが入り、書き上げたときにその生命感が作品から感じられるかどうか、がポイントとなります。どうしたら書き手のいのちが作品の中に入るか、それはとにかく読みながら書く、ひたすら書く、それ以外に方法はないでしょう。

大字仮名を書く第一歩としての拡大臨書もお勧めです。一応は古典をそのまま半切に拡大し、原寸古典から感じた、行を進める中での密度の変化、詰める伸びる、左へ右への行の揺れ等を整理し、大胆に拡大臨書の中に入れていきます。くり返し書いていく中で創作の基本が養われますのでぜひチャレンジしてください。

作品をまとめることで力がつきます。臨書作品を毎年書き続けることは自分の創作作品の崩れを防ぐことにもなります。次回もぜひご出品ください。

【篆刻作品】和中簡堂 (わなか かんどう)

日展特別会員 全国書美術振興会理事 「日本の書展」現代書壇代表

篆刻の対象とするものを大まかに挙げますと、古銅印と名人印に大別されます。古銅印の中でも古璽(官璽・私璽)と漢印～三国印(官職印・私印)があります。

名人印では明、清、民国と各時代に輩出した多くの名家の刻印、またわが国の明治～昭和に至る名家、特に人気があるのは初世・二世中村蘭台、大正～昭和の河井荃廬といったところでしょうか。

今回展では臨書・篆刻展も14回目になり、どの様なものを篆刻の対象にしたら良いのか、出品する人達のはっきりとした目標を立てて取り組まれているかを彷彿とさせる篆刻作品が応募されました。入選率は誠に厳しいものですが、内容はこれ迄にない程充実をしてきました。

浙江省博物館所蔵の古璽を始めとした古銅印の篆刻、名人印では呉讓之、趙之謙、徐三庚、呉昌碩の精緻な印の篆刻が多くありました。特に呉讓之、徐三庚の篆刻などは細密なもので、どれもこれも努力された痕跡を伺うことができる作でした。

この様な篆刻を経て創作の源泉となっていく訳ですが、大いに先人達の章法の工夫、奏刀の妙味、鈐印の方法など多くの篆刻の要因を学んでいただければと願っております。